京都国立博物館　土曜講座

豊臣秀次一族の追善と瑞泉寺

2024年7月13日　関西学院大学　山川　曉

1　豊臣秀次の生涯と「秀次事件」
2　一五〇年御忌の追善のかたち　肖像画・辞世和歌
3　瑞泉寺裂とキモノ

〈資料1〉豊臣秀次略年譜

永禄11年（1568）　秀吉の同母姉・とも（瑞竜院日秀）と弥助（後の三好吉房）夫婦の長男として生まれる。

元亀3年（1572）　秀吉が浅井氏攻略のために宮部継潤を調略するにあたり人質として養子になり、宮部吉継を名乗る。

天正元年（1573）　浅井氏滅亡。宮部継潤が秀吉の臣下となったため、このころ羽柴氏か木下氏に複姓か。

天正3年（1575）頃　三好康長の養子となり、三好信吉と名乗る。

天正11年（1583）　池田恒興の娘（若政所）を正室に迎える。秀吉の大坂城築城開始にあわせ、兵庫城に入る。

天正12年（1584）　羽柴姓に復して、羽柴信吉と名乗る。小牧・長久手の戦いで立案した作戦が失敗し、壊滅的な大敗を喫し、怒った秀吉から激しく叱責される。

天正13年（1585）　雑賀征伐に参加し軍功を挙げる。秀吉の関白就任に前後して、羽柴秀次を名乗る。43万石の大名となり、近江国の5郡を領す。近江八幡に居城を構え、八幡山城を築く。従四位下右近衛権少将に叙任。

天正14年（1586）　豊臣姓を秀吉から下賜され、同時に参議に補任。

天正16年（1588）　聚楽第に後陽成天皇行幸。

天正18年（1590）　小田原征伐出陣、奥州平定。小田原攻めの論功行賞で、尾張国・伊勢国北部5郡などを得て、旧領と合わせ百万石の大大名となる。居城を清洲城に移す。

天正19年（1591）　秀長、鶴松死去。この頃に秀吉の養嗣子となったか（諸説あり）。権大納言、内大臣に叙任され、関白就任。聚楽第に移って政務を執る。

天正20年（1592）　左大臣に補任。2回目の天皇行幸を聚楽第で迎える。秀吉名護屋城に出征し唐入りに専念。

文禄2年（1593）　秀頼、大坂城二の丸で誕生。

文禄4年（1595）　6月末、秀次に謀反の疑いがかかる。聚楽第に石田三成らが現れ、真偽を詰問。誓紙を提出。7月3日『御湯殿上日記』によれば、秀次は朝廷に白銀三千枚を献納。7月8日　秀次伏見城へ出頭。登城も拝謁も許されず、木下吉隆（半介）の邸宅に留め置かれ、高野山へ登るよう指示される。僧形となり、午後4時頃、伏見を出立。7月10日　高野山青巌寺に入り、秀次は隠棲の身となる。7月8日　秀次の妻妾子ども達、捕えられて監禁され、11日に丹波亀山城に移送。7月15日　高野山に福島正則らが現れ、賜死の命令を伝える。秀次、切腹して果てる。享年28。家臣も殉死。7月31日　秀次の妻妾子ども達、亀山城より京都へ移送。8月2日　妻妾子ども達39名、三条河原で処刑。遺体を埋めた穴の上に秀次の首を収めた石櫃が置かれ塚が造られた。人々はこれを「畜生塚」や「秀次悪逆塚」と呼んだ。

慶長16年（1611）　高瀬川開削の際に豪商・角倉了以が荒れた塚を発見。供養のために塚の場所に瑞泉寺を建立。

〈資料2〉「當寺代々建立再興什物寄附誌」（瑞泉寺文書）

当寺第八世霊空龍山代建立

（前略）

寛保四子年
地蔵堂後補并敷瓦等　　次公為一百五十年
延享元子七月
幕三張　　為同御法用也
同年
次公并御簾中御影三幅　　繪司狩野正楽並外記
和歌筆工　　置様

（中略）

（朱字）京都大森（素）搜雲斉
繪（素）搜雲斉
當寺繪縁起四冊　　延享元年ヨリ至ル宝暦三
文筆浪華　　箱入　酉年考之成就凡ソ金卅五
隠士昌阿上人　　両入用也　住持寄附之

〈資料3〉豊臣秀次および眷属像　　瑞泉寺

〈資料4〉狩野正楽永隆

狩野永隆　かのう　えいりゅう

江戸中期の画家。奈須永翁の第二子。名は章信、別号に正楽斎、通称を外記。永叔主信の門人。享保頃の人。

思文閣　美術人名辞典

https://www.shibunkaku.co.jp/biography/　7月1日閲覧

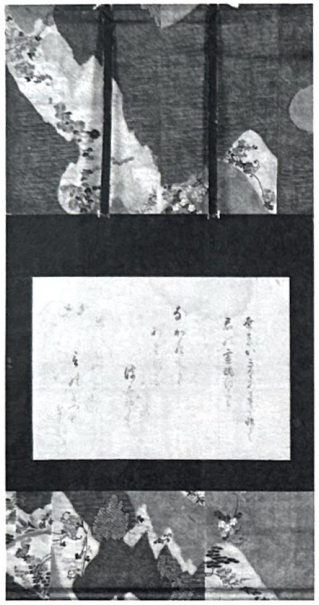
〈資料5〉京都府指定文化財　瑞泉寺伝来表具裂（瑞泉寺裂）

京都府教育委員会『守り育てようみんなの文化財』20

瑞泉寺に伝来する表具に用いられた染織品で、豊臣秀次の妻妾等の辞世和歌懐紙２０幅と瑞泉寺住持あての香衣勅許の綸旨２幅及び女房奉書１幅の２３幅からなります。瑞泉寺は慶長１６年（１６１１）に角倉了以が、非業の死を遂げた秀次一族を弔うために建立した寺院です。これらの表具裂には秀次妻妾の所用と伝える辻が花小袖や繍箔小袖のほか、いわゆる慶長・寛文小袖などの裂地を用いており、近世染織資料の文様表現や技法の美しさを知る上で高い資料価値をもっています。

写真は後西天皇綸旨で、上下は辻が花小袖を引き解いて表具裂としたと考えられます。松皮菱取りに紫と萌葱で斜め段替わり風に染め分け、紫地内に菊と藤、萌葱地内に藤と椿を縫い絞りで表しています。縦122.0cm、横62.4cm。桃山～江戸時代。（瑞泉寺　京都市）

〈資料6〉霊元天皇綸旨　瑞泉寺裂　瑞泉寺



〈資料6〉一の台辞世和歌　瑞泉寺裂　瑞泉寺

〈資料7〉一の台辞世和歌　文言比較

播磨良紀「「秀次事件」と妻妾の辞世の和歌」参照

■辞世和歌　瑞泉寺　1番

世のかきりある事を悟て　君の霊魂へ上る
ながらへて　ありふるほとの　浮世そと
おもへはのこる　言の葉もなし

■聚楽物語　1番

なからへて　ありふるほどを　浮世ぞと
おもへばのこる　ことのはもなし

■秀次物語　4番

さきへ行　人の心ハ　ならのはの
ミたのしやうとに　まち給へきみ

■関白物語　15番

さきのよも　このよもちきる　つまなれは
のりのはなの　いろハかわらじ

■太閤さま軍記のうち　1番

つまゆへに　くもらぬ空に　雨ふりて
白川くさの　露ときえけり

■太閤記　1番

心にも　あらぬうらみは　ぬれぎぬの
つまゆへかゝる　身と成にけり

■猪熊文書　1番

花のしゆらくを　君ゆへに
ふし見あらしに　散てはてなむ
あわれけに　聞に付而も　父はゝの
行へしらすと　身はなりにけり

主要参考文献

黒田智「豊臣秀次・妻子像を読み解く」（『文学』一〇-五）岩波書店　二〇〇九年
播磨良紀「「秀次事件」と妻妾の辞世の和歌」（『中京国文学』三三）　二〇一四年
土田真紀「「秀次公縁起」（京都・瑞泉寺蔵）と「関白草紙」（愛知・正法寺蔵）をめぐる一考察」（『人文科学研究』一四　二〇一八年